

## パラオの表象

— 染木煦と森田慶一の美術・建築・民族研究活動に刻まれた多層的な過去

大宮 萌恵

### 一 パラオを訪れた二人の人物

日もとっぷり暮れたある4月の夜、私達の乗る飛行機はパラオに着陸した。小ぢんまりとした入国審査の窓口を通過し、宿へと向かう車中から目を凝らすと、暗闇にかすかに浮き上がる植物は見慣れぬものなのかどうかとも識別できない。私の関心が建築・美術関係であることを伝えると、運転席と助手席から通過中の橋や観光名所についてぼつりぼつりとスタッフが説明してくれる。シャワーの下で翌日にまず訪れたい所を思い浮かべつつ、すぐに体を休めたいものの、数日前からの胃腸炎であらゆることに時間がかかる。1934年6月、染木煦も入港直前に胃腸を盛大に壊し、パラオ最初の数日を流動食と病院通いで過ごした偶然を思うも、この手の追体験は求めていなかったしやはり合点が行かない〔染木2008: 155-7〕。彼の場合は前夜の船内での饗宴、私の場合は居住地スイスからの旅路で立ち寄った日本のどこかでだろう。

私を今回パラオへと導いたのはこの染木、それに森田慶一という人物だ。「ドイツと日本の両方に順に統治された過去を持つ地域を建築家や美術家の視点から捉える」ことをテーマとする私の博士研究のうち後半部分の焦点となっている2名である。前者は絵画や彫刻を制作する美術家でありながらアマチュア民族学者としても精力的に活動し、後者は建築家であり大学で教鞭をとる建築理論学者でもあった。2人とも1930年代に「南洋群島」周遊の主要滞在先としてパラオを訪れている。第一次世界大戦後、旧ドイツ領南洋の島々のうち、赤道より北の地域が国際連盟からの委任統治領として、日本の管轄となって10年以上が経過した頃のできごとである。

彼らはいずれもこの地に何か足跡を残したような人物ではない。東京美術学校（現、東京藝術大学）を卒業し、大臣級の政治家や官僚ばかりの家庭で育った染木は、南洋周遊中も現地勤務の日本人役人や企業関係者達から手厚い待遇を受けている。7か月の滞在期間を通して数百点のスケッチや油絵を制作しては故郷に送り、東京で待つ妻への手紙という

形で詳細な日記を書き、そして各島で計約 500 点の様々な手工芸品や日用品等を収集して帰国した。現地に何かを残すどころか、もとあったものまで随分減らした当本人でさえある。森田は、東京帝国大学を卒業し、京都帝国大学で教鞭をとる、所謂エリート建築家であった。当時の日本の植民地、それも遠方の「南洋群島」に実際に建てる物を設計していたのは建築関係者の中でも技師や技手と呼ばれる、なかなか名前も記録されなかったような人物ばかりである [辻原 2022 : 43-55]。一方の帝国大学関係者で建築界に声を響かせるような人物達は、日本の「南進」に関する議論が急激に再活発化した 1930 年代後半以降も、座談会や学術誌の紙面で賑やかに意見を交わしていながら、実際に南方の領土、とりわけ「南洋群島」にまで足を運んだことのある人などほとんどいなかったのである。そのため森田は、南洋群島に設計者として滞在した建築家ではないが、建築界において発言力のある層の中では、実際に南洋を訪れ視察した経験を持つ建築家であったという点で、珍しい人物なのである。

## 二 ドイツそして日本による統治の過去

早朝 4 時、宿に窓も壁もないかのごとく蛙の大合唱が響き渡り、数楽章が歌い終えられたところで鶏の叫びが加わる。町が本格的に目を覚ますのを待ち、ひとまず国立博物館へと赴く。東側の舗装が少ない近道を選ぶと、この先に博物館が建っているとは想像できないうっそうとした木々の合間から民家の影と飼い犬に野犬、鶏が歩き回る空間が続く。奥まった入り口から館の敷地に入ると佇む数棟の建物の一つは、パイ（集会所）の複製（写真 1）である。かつての統治期にドイツ人・日本人の関心を集め続け、彼等の研究報告や紀行文、スケッチなど様々に取り上げられてきたこの建造物を初めて前にして、私はその規模や質感をようやく直接体験する。しかしこの棟も複製であり、近づくとその新しい塗りや絵柄と、写真や絵でのみ確認できる 100 年近く前のものの多くとの違いは明白である。皮肉なことに、ドイツ、ベルリンの民族学博物館に現在も展示されているもの（写真 2）が、現存する最古のパイであろう。20 世紀初頭に建物ごと移築された。工芸品や建物に関して、「本来其土地に置いて保護されなければ其の価値は半減されて了ふのであらう」[染木 1935 : 71] とは、染木が自覚し度々書き綴っていたことばであるが、このパイのドイツへの移送のことも知っていた彼はまた、「其の郷土の氣候風土がこうした悪い状態にある場合それも亦免されるべき態度であると思ふ」[染木 1935 : 71] とも述べ、葛藤を露

にしている。



**写真 1 国立博物館(パラオ、コロール)入り口横に佇むバイの複製**

(2025年4月8日、筆者撮影)



**写真 2 フンボルト=フォールム(ドイツ、ベルリン)、民族学博物館に展示されているパラオの**

**バイ (2025年7月27日、筆者撮影)**

では世界に散り散りになっている旧植民地の美術作品、工芸品、日用品等々をどうするべきなのか。これは、各地で国際的な共同研究企画として近年増加している **Provenance Research** やそれにしばしば続く **Restoration Projects** に関わる多面的な議論を巻き込む問題である。こうした国際かつ学際研究企画の一環として現在博士研究とは別に私関わっているプロジェクトは、オーストラリア北部と日本、スイス、イギリス、ドイツが複雑に入り組んだ事象を対象としているが、はじめに立てるべき基礎的な問いは場所や民族に依らないものである。まず、どこかの一展示室あるいは収蔵庫の棚一つをとっても、どこで、誰により、誰のために、何のために、どのように、何を用いて作られたものなのかは、品目一つ一つで異なることが多い。さらに、誰の手によって収集されたのか、購入品なのか、略奪品なのか、盗品なのか、贈り物なのか、「拾い物」なのか、仲介者として他に誰の手に渡ったか、現在の収蔵場所に至る前にどこに保管され、取引されたか、取引の場合、何が引き換えとなったか、記録が全て辿れることなど滅多にない。様々な記録文書が見つかって、内容が不正確なことも多く、意図的な書き換えだけでなく、用途や収集地名・人名などは誤解が誤解を生んで誤った内容が記載されていることも少なくない。これら全ての問いに向き合い、もし、返還のプロセスが検討される場合には、100年を超えるような年月を経たものに対し、現在それを最も所有すべき人物あるいは組織を判別し決定する過程が伴うが、返す側にも返される側にも想像を超える複雑な事情がしばしば待ち受けている。例えば染木のコレクションは、記録が詳細かつ収集経路が比較的単純な方であろうが、それでもなお、500点にのぼるコレクションの一つずつに改めて上記の全ての問いを立て直すとするれば、先の見えない議論がいつまでも続くだろう。ドイツの各博物館に分散したパラオの様々な品に至っては、現在パラオに存在する全博物館・記念館と収蔵庫を埋め尽くしても収まらない豊富さだ。そして、このような目に見え手で触れられる形で残されているもの以外に、美術家や建築家の手によって図面やスケッチ、写真、絵画のみの形で記録された、マテリアルにはすでに不在のものはもっと多い。統治し搾取する側の国の人間として現地を訪れながら、こうした記録や作品を残した彼らは、どんな前提と期待を持って臨み、いざ現地の光景が想像通りであったりなかったりした時、何を自身のフレーム内に留め、何をフレームから外したのか、どんな視点をどう表象したのか、溢れる問いは止まらない。

国立博物館の展示エリアに入ると、最初の企画室に可愛いイラストや文字の溢れた

掲示板が立っていた。地域の小学生達の作品を貼り出したもので、ドイツから何かの公式訪問でもあったのだろう、どれもドイツがテーマとなっている。思い思いの言葉と国旗や人々の絵の中、ふと目に留まったのは、英語で丁寧に書かれた「パラオにはドイツが必要、ドイツにはパラオが必要」という一言だ。私は日本とドイツで地元の初等教育を受けてきたが、学校でパラオという単語を見聞きしたことはおそらく一度もないのではないか。後日この展示の話聞かせてみたドイツの知人友人達も毎度揃って、「ドイツの子供の中にパラオという国を知る子が何人いるか」、「はたまたドイツとの歴史上の関係に至っては、あなたから聞いて初めて認識したようなものだ」、と返ってくる。子供達による文字とイラストであるだけに一層鮮烈に迫ってきた、歴史認識のいびつさであった。

その後も、この博物館の図書室やエピソンミュージアム訪問、それにバベルダオブ島でのパイと遺跡巡りなどを通して各地で解説文を比較したり、地元の方々から説明を受けたりする機会に恵まれた。各展示では、パネルごとに、調査協力している研究員が現地パラオに加え、ドイツから、日本から、はたまたアメリカなど他の国からと（個人の国籍ではなく所属機関という点で）様々な背景で、それが解説内容にかなり判別できる形で表れていることが多かった。私が資料で読んできた情報と事情の説明が違ったり、ドイツ統治期に既にパラオに出入りしていた日本人に対するドイツ人からの視点が反映されていたり、同じできごとや人物に関しても描写や批判の角度が多様で、数行の解説文がいかに訪問者に全く異なる印象を残し得るかが実感できる。研究論文や書物となればなおさらである、と改めて自覚し、常に自らの言葉を一步引いて眺める心がけを、と気が引き締まる。

### 三 染木と森田がパラオに見たもの

建築・美術・民族学の学術誌に調査結果や論考を投稿した森田と染木であるが、視覚資料として現地で蓄積したものは、森田が主に図面と写真だったのに対し、染木はスケッチと油彩画であった。彼らはそれぞれパラオに何をみてどう表象したのか。先述した通り建築家の中でも特徴的だった森田の立ち位置に加え、彼の調査の手法に私が森田に注目している大きな理由が在る。写真と図面、そして発表論考からは、彼がドイツや日本が建設したものには関心を示さず、現地の伝統家屋の調査に注力していたことがうかがえる（写真3）。しかし彼の調査の特異な点はその関心対象ではなく、それら伝統家屋を調査する際にかつてドイツから依頼・派遣されて調査を行った研究団の出版物に常に依拠している点な

のである。ここには森田の本来の専門分野である古典ギリシャ・ローマ建築理論と近代ドイツ・フランス美術理論における理念が関わっている。彼自身多くの論文や著書で強調しているように、森田は一次資料を原典で読んで解釈することの重要性を説き続けた人物だ〔森田 1974 : 677〕。間に他言語のフィルターを入れないことで明快化する理解、これが彼の専門研究の理念であり、パラオでの調査においてもその姿勢を貫こうと試みたのだろう。しかし、パラオには現地の文字による記録はなく、ストーリーボード（写真 4）と呼ばれる絵柄や口頭での伝承、それも特定のコミュニティの中でもさらに許された者にしか伝えられない数々の語りが重要な役割を担う。彼のノートには各民族の言語を学ぶ努力の形跡はあるが、夏季のみの滞在で、複数の言語で理論や歴史を書き起こせる程の上達は到底望めない。彼にとって欠かせない原典としての文字資料は存在しない。そうした状況で森田が頼ったのが、ちょうど自身の得意とするドイツ語で書かれた、先代の統治者達であるところのドイツ人学者等による学術文献だった。<sup>1</sup> しかしここで生まれてしまった矛盾が、「依拠すべき文字資料」と「原典としての一次資料」が一致しなかった点である。自身の研究理念に忠実に調査に臨んだあまり、せっかく直接現地に赴いているにもかかわらず、観察や解釈がドイツというフィルターを通したものとなってしまったことを、不満足な研究成果という形で彼自身も自覚していたようだ〔大宮 2024 : 571-3〕。滞在後数年間の論考投稿や講義・講演以降、彼がこの南洋調査に言及することはなかった。

---

<sup>1</sup> 森田がとりわけ頻繁に引用したのが以下である。Krämer, Augustin. 1917. *Palau: Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, Friederichsen.; Kubary, Jan Stanislaus. 1889. *Ethnographische Beiträge zur Kenntnis des Karolinen Archipels*, Trap.

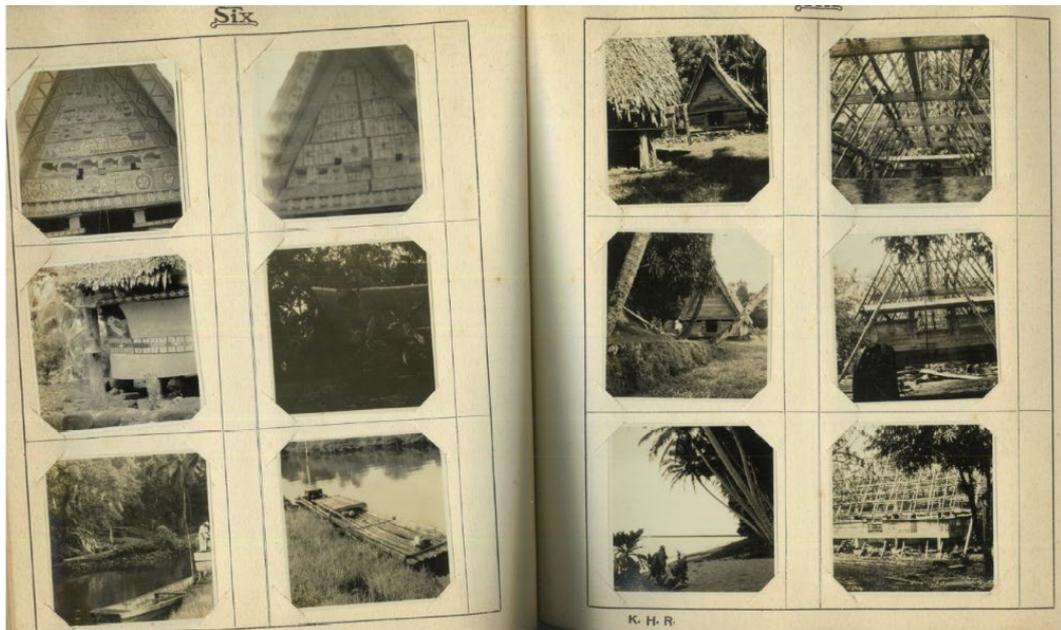


写真3 森田慶一のアルバムの一頁、京都大学建築学科にて

(2023年9月11日、筆者撮影)



写真4 パラオ、バベルダオブ島のバイ内部のストーリーボードの一例

(2025年4月7日、筆者撮影)

染木の南洋周遊に伴う活動にも複数の特徴があるが、中でも彼が他に 1930 年代前後に南洋を訪れた数十名の日本人美術家達と異なっていた点は、その民族学的調査・収集と、帰国数年後に南洋のモチーフを用いて描いたいくつかのモダニストな油彩画（写真 5）であろう。近年、南洋を描いた様々な美術家による作品が展示される企画が時折見受けられ、染木の作品の一部もそこに並ぶことがある。そうした場でもとりわけ異彩を放っているのは、たくさんのスケッチやそれを基にした版画などよりも、この技巧的な油絵の方だろう。シュルレアリスム、キュビズム、といった、ヨーロッパで同時期に流行した技法を明確に採り入れた数枚の油絵の中には、一見モチーフが何かはっきりしないものも多い。しかし、彼のスケッチ、メモ、日記、絵葉書などそれぞれ数百枚ずつに上る遺品を調査してゆくと、各作品内のほぼ全ての要素に基となっているものが特定できるのだ（写真 6）。<sup>2</sup> いつどこで見つけた何を採用したかのみならず、採用しなかったか、どう改変したかも細かく特定してゆくこの作業にはかなりの時間を要したが、そこから浮かび上がったのは、ただの「染木の油絵の元ネタ集」ではなく、彼が南洋で何を見たかったのか、そのうち何を帰国後に人々に見せたかったのか、何を作品に描き留めたかったのか、といった問いに繋がるものであった。いざ、パラオを訪れた私は、彼にそうした判断や選択をさせしめた光景を辿るべく、辺りに目を凝らす。

---

<sup>2</sup> 分析と考察の詳細は別稿にて近日発表予定。



(左) 写真5 染木煦『失題』1936年頃、油彩 (町田市立国際版画美術館蔵)

(右) 写真6 染木煦の1934年南洋周遊時のスケッチより Shintel という植物

(個人蔵、林勲男大阪国立民族学博物館名誉教授によるスキャン)

しかし、森田や染木が訪れた頃とは当然大きく変わった町並みや人々の暮らしに対し、一見、安定した姿を保つ自然の風景が実はちっとも不変などではなかったことを最も突き付けられたのは、ペリリュー島訪問だった。水面付近を長年波にえぐられ特徴的なキノコ型となっている島々 (写真7) をいくつも通過しながら、染木がその形と由来を妻、愛子への手紙で説明していた一節を思い出す [染木 2008: 178-9]。自然のこうした姿は当時も今も、と呑気なことを考えつつ、水深や陽の向き風の向きによって鮮やかに色を変え輝く水面 (写真8) の、難関といわれる航路を熟練の技で進むボートに身を任せる。初めて

見るあおやみどりの色の多彩さと、空の明るさ、そして徐々に近づく島の木々の色濃さに視覚の消化が追い付かない。しかしいざ上陸すると、うっそうとした高く色濃い植物に囲まれて、民家、商店、学校などの間々に現れるのは、手掘りの岩洞窟、地上や半地下のトーチカ、銃口および監視用の岩壁の穴、発電所跡、防空壕、破壊された水タンク、朽ち行く戦闘機に戦車（写真 9）。さらに、この数年になって急に米軍が道路舗装や飛行場建設に力を入れ始めたために真っ平らで太く整備された道や、テクノロジーやインフラとして日本が建設したものの使われ続けていない真新しい見た目の発電所が、この島の置かれている状況を映し出す。1945 年、パラオで最も戦禍を被った島の一つであるペリリューは、人工物の残骸と焼け野原となったその痕の上に 80 年の時を経て森と人間の暮らしが営まれる空間だ。遠くから見えた深緑の島、内側から見てもまるでずっとそこに生え続けているかのように静かに満ちる植物がつくる風景には、染木や森田が 1930 年代に眺め、切り取った時の風景（写真 10）のほんのひとかけらも含まれていない。



**写真 7 染木煦も描き留めた、水面に触れる部分を波でえぐられたパラオの島々**

（2025 年 4 月 5 日、筆者撮影）



**写真 8** 次々と色が変わる遠浅の海上をボートでペリリュー島に近づく

(2025年4月5日、筆者撮影)



**写真 9** ペリリュー島の元日本空軍 HQ 附近、植物に覆われた戦跡

(2025年4月5日、筆者撮影)



写真 10 森田慶一のアルバムより、1938 年に撮影された「ペリリウ村」の一光景

(2023 年 9 月 11 日、筆者撮影)

#### 四 再訪のために

帰りの空港で、同じ便を待つ観光帰りと思われる日本人搭乗者の数に驚いた。滞在した 10 日程を通して、ほぼそうした滞在者を見かけなかったためだ。観光客用のリゾートエリアは確かに敷地ごと囲われたようなところが多く、生活圏と分かれている印象ではあった。日頃から建築家や美術家を対象に研究をしていると、日常の町並み、建物、生活空間、それに食事や会話の体験が行く先々で重要であるが、次の機会には今回見かけなかった非日

常にも目を凝らしてみたい。ドイツと日本の統治を経験した地としてのパラオ、また、二人の人物の残した論考や作品を考察するために欠かせない土地としてのパラオに赴いたが、その目的に拘泥しすぎると、私自身もまた、彼らのフィルターを通したパラオを見ようとし、目の前に実際に見えているものを見ようとしなのではないか。これはどの土地に関わるどの人物や作品の研究に取り組む際にも恐れ、気に掛けている点である。今滞在では、彼らの足跡自体とは関わりのない活動も意識的に多く取り入れ、パラオの島々の近年の日常に近い部分を少しばかり経験できたことに感謝している。

### 参考文献

- 大宮萌恵 2024 「空白となった超越的なもの：森田慶一による 1938 年夏の南洋群島調査滞在」 『日本建築学会計画系論文集』 89 (817) : 568–77。  
<https://doi.org/10.3130/aija.89.568>.
- 染木 煦 2008 『書簡に託した「染木煦のミクロネシア紀行」』 求龍堂。  
—— 1935 「パラオを語る」 『美術』 10 (7) : 64–71.
- 辻原万規彦 2022 「別巻 2, 第一部『解題』, 第二部『解説』」 『復刻版：南洋庁公報』 ゆまに書房。
- 東京新聞社・町田市立国際版画美術館編 2008 『美術家たちの「南洋群島」』 東京新聞。
- 森田慶一 1941 「内南洋の建築」 『建築と社会』 25(8) : 1-7。  
—— 1974 「ウィトルウィウス研究ならびに西洋古典学に基づく建築論形成への貢献」 『建築雑誌』 1083 : 677-9.
- Krämer, Augustin. 1917. *Palau: Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, Friederichsen.
- Kubary, Jan Stanislaus. 1889. *Ethnographische Beiträge zur Kenntnis des Karolinen Archipels*, Trap.

(おおみや・もえ チューリヒ大学)